

地域と協同の

2017年10月25日発行

158号

研究センターNEWS

【巻頭言】

わたしと「地域と協同の研究センター」

各務原市八木山地区社協 清水孝子

刺激を

2017協同集会in東海では興味深い話がいっぱいでした。南医療生協のお話には、共感また共感。「おたがいさまのまちづくり」では「建前でなく瞬間、瞬間だ」という話もありました。私たちの「ささえあい活動」でも、Aさんの現実を知ってしまったら、「きまりだから、これでやめます。」とは言えない。深く関わりたくなることと同じだと思って聞きました。

ここで得た情報から、滋賀での全国の協同集会に参加しました。「時代の変化に対応できる地域共生社会を、それはボランティアではない。社会的企業を。」という話に納得。

このように、「地域と協同の研究センター」は、私に次々と新しいことを教えて刺激をしてくれます。また、私の考え方がこれで良いのだという確認をさせてもらえます。そして今ぶつかっている課題の大本は、こんな歴史的背景や制度があるのだと、私の世界を広げてくれます。

手法も

専務理事がスマホを自由自在に使って会を進めておられる姿に、いつも憧れています。それで近く実施する地区社協のワークショップで、従来のB紙使用から、各グループがA4紙に書いたものを、スマホで写真を取り、スクリーンに映し出すことを計画しています。私の一大改革に、今わくわくしています。

難解

「地域と協同の研究センター」のメンバーたちの語る話は、時に私にとって難解だと感じる場合があります。ここで語られていることを、私の活動にどう結びつけたらよいの?と思うことも。そうここは「研究」センターだと思いますが。

私の「協同」を

こんなこともありながら、私は本山(※)に通っています。このような知的な人たちに会える場はそうありません。また人々が温かいです。選りすぐりの情報に出会えます。

私だけが学ぶのではなく、仲間と共に学習しなくては、私たちの活動を向上させることができないと常に思い続けています。

センターで得た情報から、秋田県の藤里町社協の話聞きに、設楽町(愛知県北設楽郡)の「ゆたか福祉社会・設楽福祉村キラリンとーぷ」まで仲間5人で出かけることができました。「地域と協同の研究センター」に関わる勉強会に仲間を誘って、私の「協同」を広げていきたいと思っています。

(しみず・たかこ)

※本山：コープあいち生協生活文化会館・名古屋市千種区、研究センター事務局所在地

9月～11月、研究センター会員の輪がさらに広がるように「会員おさそい月間」に取り組みましょう。11月も皆さんの周りの方におらせしましょう。

個人会員(正・賛助)の皆さんに「研究センターNEWS」をもう一部お届けしました。お知らせの方、職場の仲間にごぜひ研究センターをご紹介いただき、秋の企画にも一緒にご参加ください。そして、私たちの仲間入りを考えてもらう機会を広げましょう。研究センターパンフレットを刷新。ご希望の方は事務局までお気軽にお問い合わせください。



CONTENTS

【巻頭言】わたしと「地域と協同の研究センター」	1
清水孝子	
【報告】「2030年へのメッセージ企画第二弾」報告	2
向井 忍	
【報告】協同の未来塾(研究センター事業紹介)	4
事務局	
【情報クラブ】と10月の活動(P.6)	5
【企画案内】名古屋市立大学 市民公開講座	8
【書籍紹介】『多文化共生地域福祉への展望 多文化共生コミュニティと日系ブラジル人』(著者:朝倉美江)	8
11月の予定	8

「2030 年へのメッセージ企画 第二弾」【報告】

社会的課題の解決に向けた連帯

～協同が生み出す「レジリエンス（困難からの復元力）」を問う～

9月16日（土）午後、生協生活文化会館で約50名が参加しました。少子高齢化が進む2030年にむけて“持続可能なまちづくり”をよびかけるメッセージを深める第二弾。”人と人のつながりで生まれる多様な関係性“が”人と地域と社会の“レジリエンス（困難からの復元力）”をどう生み出すかがテーマです。

基調講演（成元哲教授）では、“地域の核としての子ども食堂“をキーワードに、支援・被支援を越えて「当事者」主体の関係をどうつくるか、コミュニティの核として「ゆるやかで、ハイブリッドな、重層的つながりを特質」とする「居場所づくり型市民運動」のイメージが提示されました。ワーカーズコープ愛知三河からは、1人の”困った”への気づきから、放課後児童デイやみんなの食堂を開始して、出会った仲間が当事者として関わる実践が紹介されました。コープぎふ おたがいさま東部からは、組合員の枠にとどまらない有償ボランティア“おたがいさま東部”で「地域の困った」の声をうけと

め、応援者と利用者のつながりをコーディネートして、「支援者-受益者」ではない対等な当事性を生み出していることが紹介されました。コープあいち生活支援課からは、豊明市で「住民の困った」に応えて、南医療生協・JA あいち尾東・コープあいちが協同で生活支援事業を準備していることが紹介されました。

会場からの質問票に報告者が回答し、コープみえ・統括部長からはコメントとあわせて、鈴鹿センターでNPOと協力した母子の支援、社協とのフードバンク協定、住民の居場所づくりの取り組みが紹介されました。

「家族のつながり」が不安定になり、自己肯定感を持てる新たな関係をつくることと「困った」を解決する人のつながりをつくる双方が必要な現代に、協同組合が自己完結でなく地域に開かれた「重層的で、ハイブリッドで、ゆるやかなコミュニティの核」となっていく必要性を考えさせる企画となりました。

基調講演“地域の核としての子ども食堂”～子どものリスクとレジリエンス～

成元哲 中京大学現代社会学部教授・あいち子ども食堂ネットワーク事務局長

日本の子どもは（所得、学力、健康、生活満足度）を指標にすると「貧困の深さ」が大きい。村上伸子氏（新潟県立大・公衆栄養）の、週末二日を含む四日間、836世帯の調査によれば、低所得層の子どもほど免疫力が低下し、風邪を引きやすく、貧血などの体調不良が見られる。困難な状況に対処し逆境に打ち勝つことを促すうえで「リスクの影響を減らす」「ネガティブな連鎖を減じる」「自尊心及び固有の能力を高める」「ポジティブな機会を提供する」ことが重要。子どもの貧困・孤立の背景には「親の社会経済的状况」「家庭環境」「学校での不適用」「友人やつながり」「地域環境」があり、社会政策として「1.所得再分配」「2.生活保護制度の改善」「3.ひとり親家庭への支援」「4.家族以外の多様な居場所」「5.地域におけるつながり」があるが、2・3・4・5の施策には新しい連携・協働が必要。「子ども食堂」は食を通じて孤立した人を

つなぎ、体験・交流や出会い、コミュニケーション、学習支援等の多様な豊かさを持っている。

「呼びかけ（偏見払拭）」「開設数増やす」「開催頻度をふやす」「資金源」「ボランティアの育成」などが課題。当事者を主体とする関係性を作り、行政の下請け・動員型ボランティアでないカタチで「居場所づくり型市民運動」になるか。コミュニティの核として、1.ゆるやかにつながる、2.多様な種類のつながりのハイブリッド、3.重層的につながるを張り巡らす仕組みが期待される。

感想：『「子ども食堂」について社会学的な視点で伺えたことが興味深かったです。』

感想：『子ども食堂の可能性について示唆に富んだお話でした。現代社会においては「居心地のよい居場所」は子どもだけでなく、高齢者をはじめ、若者もあらゆる世代の人々にとって必要なのでは、と思いました。』

実践報告①「一人の困ったに向きあうことが、みんなの良かったにつながる」

櫻井早苗

（ワーカーズコープ愛知三河事業所 所長）

一人目の「困った」の出会い。2012年に児童館にきた28歳の女性は虐待をうけていた。市役所と社協と相談しグループホームを住家と

し、「一緒に働きたい」との希望からボランティアとして受け入れ、“働ける場所”として「放課後等デイサービス」を立ち上げた。「ディズニー

ランドに行きたい」という夢も今年実現した。二人目の出会いは 2015 年。餅つき大会で認知症と思われる一人暮らしの老人がいた。人の関わりが途絶えている事に気づき翌年の 11 月から「みんなの食堂」を始めた。平均 75～80 名が参加。新聞店は古紙回収のお金を、農家からはお米を頂けた。受付や配膳は放課後等デイの子どもたちの仕事。三人目の出会いは 2016 年。通ってくるベトナムとネパールの子どもは日本語は喋るが先生の話を理解できていない。

実践報告②「おたがいさまの活動でみてきたこと」

松村 三千代（コープぎふ おたがいさま東部 代表）

「おたがいさま東部」は応援者 236 名。運営委員 18 名、コーディネイターも 18 名。利用者は組合員でなくてもいい。なにが困りごとかは利用者が決める。「誕生日なのでスシローでお寿司を買ってきて」の依頼では、メッセージカードと花を持って訪問。掃除したあとお茶を飲んでおしゃべりすると「友だちも困っている」と話しがでる。「私のやりたい夢」応援でハンドマッサージやネイルアート教室を開く。入園準備のためミシンをできる人を探す。2016 年は 5009 時間。可児・多治見・恵那店では「おたがいさまカフェ」を開いている。認知症サポーター養成や成年後見制度などは包括支援センターや社協に講師依頼してつながっている。通院介

なんとか小中学対象に学習支援を実施したい。「困った」を仲間と話し合うことで事業がうまく、新たな「困った」の出会いが新たな事業に循環する。地域の困り事に寄り添って住みやすい地域づくりを進めていきたい。

感想：『「一人の困ったに向きあうことが、みんなのよかったにつながる」に共感できます。現場で参加者の様子を見てみると問題が見えてくる、解決にむけては仲間と話しあっていく、大変参考になりました。』

助や買い物支援の依頼もくる。多治見・美濃加茂市の生活支援協議体にも参加。利用者は「どこにお願いすればいいかわからなかった」と言われる。気にかけてくれる人がいる、誰かが待っていてくれる、ありがとうと言ってもらえることで社会につながる実感が持てる。誰もが安心して住んで楽しくなる地域づくりを応援したい。

感想：『利用者は組合員でなくていい、というやわらかさは良いと感じています。応援内容が本当に幅広く、こんなことでもお願いできるのねと実感できる内容でした。これからはがんばってほしいと思います。』

実践報告③「豊明市・生活支援における協同組合間協同と、コープあいちの取り組み」

杉原 昌博（コープあいち福祉事業本部生活支援課 課長）

豊明市は人口 69000 人、高齢化率 25%だが 1000 人当たり訪問介護事業所は 0.7 で県下 69 地区中 68 位。市は地域包括ケアにむけて藤田保健衛生大学、UR 都市機構と「けやきいきいきプロジェクト」を締結。民間団体と「公的保険外サービスの創出・促進協定」を結び、これらにコープあいちも参加している。市から JA あいち尾東、南医療生協、コープあいちに対し「住民主体型サポート事業」ができないか相談があり、南医療生協のおたがいさまの家『いっぷく』を拠点に、三つの協同組合で 11 月から始める準備中。南医療生協はおたがいさまシートを活用

した支え合い。JA あいち尾東は“ふれあいサロン（ミニデイ）”、コープあいちは“くらしたすけあいの会”。それぞれも継続しつつ、新たに地域通貨（30 分 200 円）による生活支援を始める。コープあいち豊明店はお店から配達する「ふれあい便」も始めている。

感想：『「協同組合間協同」を聞くことが増えてきました。県内ではコープみえさんの方が圧倒的に知名度があるので、お互いに困っていることがあれば一緒に取り組めたらと思っています。まずはエリア会との懇談から始めたい。』

阪 達男（コープみえ 統括部長 鈴鹿センター）

鈴鹿センターではエリア会がコープカフェを開き交流する居場所をつくっている。見守り協定も準備中。社協と協力して、組合員がキャンセルした商品在庫をフードバンクに回せないか準備中。出産後のお母さんを支援する NPO 法人と一緒に子育て支援にも取り組む。これからは行政諸団体とくらしの問題に取り組む。

感想：『コープみえの阪さんの報告、よく分かりました』

感想：『地域の特性を活かした取り組みが実感できた。行政はともかく取り組みをパターン化して押し付けがちになるが、草の根的な多様性豊かな地域の取り組みと、うまく連携して進めることが大切なのだろう。』

※敬称略

報告：研究センター専務理事・向井 忍（むかい・しのぶ）

協同組合への確信，自らの実践で，【協同の未来塾】 求められる協同組合の役割を発揮したいという崇高な志しを実感

「協同の未来塾」は一方的な座学で学ぶのではなく、受講生がお互いに話し合い、考え合い、研究しあう進行で開講してきました。第三期の今年は「コープぎふ」「コープみえ」「コープあいち」の要望を企画委員会で協議。カリキュラムを1年間として6月に開講。9月、第4回が終了しました。

「協同の未来塾」の進行状況を紹介します。「関わる人のエンパワメント」の実践を共有ください。

「協同の未来塾」を開講した背景

大学でも「協同組合論」の講座が減少し受講機会が減り、新卒者は入協前に「協同組合」に関わる理論的な知見を持つという環境が著しく後退。「協同組合」を理論的に学び合い、研究し合う場づくりを期待する声が各生協から研究センターに寄せられていました。

「協同の未来塾」の目的

「市民社会の協同の意味を深くとらえ、協同を経済的・社会的に理論的に語れる」、また「常に協同の今を問い直し、協同の未来創造にロマンを馳せ、協同の価値を創造する実践的な主体性を生む」ことを意図して、「協同の確かな実践をつくり、未来形成を担える存在としての人材を育む」ことを目的に掲げました。

企画委員会

開講まではニーズ主体者として「協同の未来塾」構想を練り上げ、開講以降は「運営委員会」として、塾の場での「ファシリテーター」としての使命と役割を担っています。塾長を八木憲一郎氏（コープあいち顧問）、副塾長は向井清史氏（名古屋市立大学特任教授）に担っていただき、研究センター常任理事2名と東海3生協および大学生協東海ブロックから7名の役職員が企画委員会を構成しています。

第三期の状況（単元と講師補足欄に掲載）

9月22日（金）～23日（土）、コープこうべ協同学苑（兵庫県三木市）を訪問。初日は第2単元：資本主義経済システムと非営利・協同セクター（講師・向井清史氏）の講義と「商品の良さを伝えるにはどのような工夫が有効か？」の共同研究。二日目は各生協のルーツを塾生が創設者の皆さんからききとり、レポートに仕上げ共有。岐阜地区市民生協、飛騨生協、岐阜消費生協、三重県民生協、伊勢消費生協、みやがわ生協、みえきた市民生協、めいきん生協、みかわ市民生協、日本福祉大生協、名城大生協の歩みも含めて創設に学びました。

協同学苑史料館ではコープこうべの歴史と地域の一員として兵庫県の様々な地域で協同活動を共にする事例に触れました。

協同の未来塾第一期、二期生の感想

- 今後をどう自身が考え、どう行動していけたら良いのか、思考軸が出来た。
- 地域に必要とされる協同組合であり、組合員と共に地域のくらしの困りごと、問題解決に取り組んで行く事を胸に、今後もいくつもの課題に正面から向かっていきたい。
- ユネスコの無形文化遺産に登録された協同組合を、未来に引き継ぐ重要な財産となるようにしたい。

第三期受講生を紹介して報告を閉じます

【コープみえ】甲斐淳一、阪達男、中村 哲、西尾直樹、屋本佳功、【コープあいち】加藤和広、久保優治、渡邊滋記、竹内 彰、鈴木章人、本川尚史、小沢哲、【コープぎふ】谷井宏嗣、市川盛嗣、福永博隆、中野拓二、大嶋美幸、【名城大学生協】高木利彰、【日本福祉大学生協】外村順一（以上19名、所属生協単位・順不同、敬称略）

以上

第三期の単元と講師（計10回）

第1単元	協同組合論：兼子厚之氏（ファシリテート・サポーター）
第2単元	資本主義経済システムと非営利・協同セクター：向井清史氏（名古屋市立大学）
第3単元	社会関係資本としての生協～協同組合とコミュニティ：小木曾洋司氏（中京大学）
第4単元	協同組合史～近代史と現代史として：杉本貴志氏（関西大学）
第5単元	協同組合の哲学：中川雄一郎氏（明治大学）
第6単元	協同組合の特性ある経営と価値創造の事業構築へのイノベーション論と非営利組織のマーケティング論：加賀美太記氏（就実大学）
第7単元	協同組合人の思いと未来へのロマン～生協創設の思いとロマンから学ぶ：田邊準也氏（地域と協同の研究センター理事）、水野隼人氏（全岐阜県生活協同組合連合会名誉顧問）、八木憲一郎氏（コープあいち顧問）
特別講座	地域福祉型生協への展望（仮題）：朝倉美江氏（金城学院大学）

編集：研究センター・事務局 渡辺勝弘（わたなべ・かつひろ）

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価 税別
▶子どもたちの 未来を支える 生協の取り組み NAVI 2017. 10 No. 787 日本生活協同組合連合会	特集 子どもたちの未来を支える生協の取り組み <コープのある風景> 鳥取県生協 <こんにちは！生協女子ですっ！> コープ九州事業連合 山内理子さん <地域に愛される店づくり・人づくり> コープえひめ コープ久米 <私の本ナビ> パルシステム山梨 <エッセイ わな獺師の春夏秋冬> 千松信也 <宅配・現場レポート> コープこうべ <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP商品> CO・OPくっつかないホイール <日本全国ふだんのくらしを支えたい> CO・OPとやま <☆突撃☆あなたの町の組合員活動> コープしが <明日のくらし ささえあうCO・OP共済> コープあいち <この人に聴きたい> 女優・タレント 生稲晃子さん <ほっとnavi> コープぎふ 佐曾利消費生協	2017 年 10 月 A4 判 36 頁 360 円
▶福祉事業の 生協モデルとブランド を構築する 生協運営資料 2017. 9 No. 297 日本生活協同組合連合会	●巻頭インタビュー わが生協、かくありたい！ 今後の日本の生協運動はどうあるべきか その上で日本生協連が果たすべき役割を考えていく 日本生協連●代表理事会長 本田英一 特集 福祉事業の生協モデルとブランドを構築する 1 業界に先駆けて事業モデルを転換 利用者本位のケアで在宅介護を支える (福) 協同福祉会●理事長 村城 正氏 2 デイサービス中心の事業から 地域密着型の事業への転換を図る エフコープ●福祉事業部 部長 林 浩一氏 3 事業ネットワークの要として福祉事業を位置付け 組合員の「生涯価値の最大化」を目指す 福井県民生協●常務理事 檜原弘樹氏 福祉事業部 部長 蓬萊谷修久氏 4 超高齢社会における福祉事業の発展に向け 「事業モデル転換」と「ブランド構築」を 日本生協連●組織推進本部 福祉事業推進部 部長 山際 淳 ●これからの店舗事業のあり方を考える 第9回 「第2創業期」に逆境を乗り越え黒字化を実現 商品と売場、改装のレベルアップは続く おかやまコープ●常務理事 商品管掌・店舗事業本部長 三宅晴久氏 ●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ 第21回 “人の集まるところに行く”をモットーに 仲間づくりのチャンネルを開拓 コープ東北サンネット事業連合●共同購入運営本部課長トレーナー 柴崎 系氏 トレーナー 小野寺史記氏 みやぎ生協●共同購入運営部 法人営業課 営業マネージャー 桑本真之氏 ●特別企画 倫理的消費への関心が高まる今こそ グリーン・ウォッシュに注意すべき NPO 法人 環境市民●代表 杵本育生氏	2017 年 9 月 B5 判 100 頁 870 円 (送料別)

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
▶JA自己改革の現場から 月刊 J A 2017. 10 vol. 752 全国農業協同組合中央会	特集 スゴイ農業、スゴイ J A J A 自己改革の現場から ① 組織力を強化しつつ食料農業協同組合を目指す先進的都市型 J A — J A 福岡市（福岡県）の取り組み 和泉真理 ② 働きやすさが育むおいしいキュウリ — 堀越徹也さんの取り組み（群馬県前橋市） J A 全中広報部 農政トピック 担い手の育成・支援について考える J A 全中 J A 支援部 営農担い手支援課 きずな春秋 — 協同のこころ — 童門冬二 私のオピニオン 国谷裕子 J A トップインタビュー 都市型 J A で園芸地帯所得アップへ 宮本隆幸（熊本県 J A 熊本市 代表理事組合長） 展望 J A の進むべき道 新たな基本政策の確立に向けて 金井 健（J A 全中常務理事） こんなときどうする？ 思いが伝わる写真を撮るために ② 鈴木正美 海外だより [D. C. 通信] 連載 77 アメリカの農業を支える外国人労働者 吉澤龍一郎 平成 28 年度 J A 経営マスターコース優秀論文紹介 修了論文大賞 J A 八王子が都市型農協として進むべき先 有竹慎吾 / J A 八王子（東京都）	2017 年 10 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,109 円 （消費税込）
▶女性と子どもの貧困 — 子どもの貧困の背景 にある経済格差 — 生活協同組合研究 2017. 10 Vol. 501 公益財団法人 生協総合研究所	■巻頭言 子どもの貧困 武田晴人 ▶特集 女性と子どもの貧困—「子どもの貧困」の背景にある経済格差— 下層化する女性たち：労働と家庭からの排除と貧困 宮本みち子 シングルマザーの貧困と子どもたち 赤石千衣子 学校における心理的援助と社会福祉的援助をつなぐ視点 — 文献研究と事例考察からの展望 — 本田麻希子 いま、イギリスから何を学ぶか：子ども貧困法の制定とその後 中嶋哲彦 女性と子どもの貧困を地域で支える：組合員の活動と生協事業 近本聡子 コラム 1 経済支援の必要な子ども家庭に届く支援 — フードバンク山梨の事例から — 近本聡子 コラム 2 まつやま子ども食堂 — 貧困から立ち上がり地域への助け合いへ — 野中玲子 ■時々再録 みやぎ生協ファミマ・コープ見学記 白水忠隆 ■本誌特集を読んで（2017・8） 大木 茂 櫻原弘志 ■新刊紹介 松岡真宏・山手剛人著『宅配がなくなる日 同時性解消の社会論』 高橋伶一 写真：ジョー・オダネル、編著：坂井貴美子 『神様のファインダー』 菅谷明良 ■研究所日誌 ■アジア生協協力基金 2018 年度・助成金一般公募のご案内 ■公開研究会（京都 10/18） スイスの二大生協の歴史と現況 ■2017 年度生協総研賞 第 11 回 「表彰事業」 受賞作の発表	2017 年 10 月 68 頁 B5 判

10 月の研究センター活動紹介

10/1(日)	2017 協同集会 in 東海
10/2(月)	尾張地域懇談会・世話人会
10/4(水)	岐阜地域懇談会・世話人会
10/6(金)	研究フォーラム「環境」世話人会
10/9(月)	共同購入事業マスターコース④
10/12(木)	三河地域懇談会・世話人会
10/13(金)	11.18「農山村移住と農のある…」実行委員会
10/17(火)	くらしを語りあう会

10/18(水)	常任理事会
10/20(金)	愛知の協同組合間協同相談会
10/21(土)	第四期研修奨励助成研究報告会「外国人ヘルプライ ン東海・後藤氏」
10/24(火)	三重地域懇談会・世話人会
10/26(木)	協同の未来塾⑤
10/27(金)	組合員理事セミナー⑧
10/30(月)	研究フォーラム「食と農」世話人会
10/31(火)	地域福祉を支える市民協同フォーラム公開報告会 (小木曾洋司氏)

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 型 定価 680円
▶消費増税に頼らない 社会保障財源の提案	農協組合長 インタビュー (43)「身近で親しまれる J A」を目指して 山上一成 村上一彦 平成 28 年度文化連会員単協決算分析 佐治 実 医療介護連携・地域づくりと厚生連病院の経営改革をテーマに 二木教授の医療時評 (152) 『地域力強化検討会最終とりまとめ』を複眼的に読む 二木 立 醍醐 聰	2017 年 10 月 B5 判 80 頁 文化連報 編集部 03-3370-2529 *注
	消費増税に頼らない社会保障財源の提案 (上)	
文化連情報 2017. 10 No. 475	ターミナルケア意識一特にがん告知一に関する大規模アンケート調査 服部 晃 ・ 田邊直仁 ・ 岩田文英 ・ 服部麗波 現代社会と協同組合 (7) 協同組合の価値・原則と現代的意義 北出俊昭 第 95 回国際協同組合デー記念中央集会 小松真之助 韓国農業の実相ー日本との比較を通じて (14) 米韓 FTA と商品貿易 品川 優 臨床倫理メディエーション (16) 「医療メディエーション」モデルによる意思決定 (1) 中西淑美 セントラルキッチンさく取り組み (4) 松本誠治 職員向け“へる塩”メニューははじめました！ 高田俊彦 ・ 今本美幸 ・ 菊池一三 岡田玲一郎の間歇言 (144) 算術の介入の余地のない診療報酬の実現を求める 岡田玲一郎 デンマーク&世界の地域居住 (101) アメリカ：CCRCとインディペンデント・リビング 松岡洋子 熱帯の自然誌 (19) 私の暮らし カリマンタンの町にて (1) 安間繁樹 イギリスの社会的企業 若者就労支援：The Box Youth Project (1) 組織と活動 小磯 明 ◆第 4 回厚生連放射線科医療機器ライフサイクルコスト会議開催のお知らせ ◆第 20 回厚生連医療経営を考える研究会開催のお知らせ ◆平成 29 年度厚生連院内感染予防対策〔基礎〕研修会開催のお知らせ ◆第 8 回厚生連医療メディエーター養成研修会・ 第 5 回厚生連医療メディエーター実践者スキルアップ研修会開催のお知らせ □書籍紹介 日本の医療と介護 / 小磯 明 ▶線路は続く (115) 庄内平野の田舎電車 / 西出健史 ▶最近見た映画 50 年後のボクたちは / 菅原育子	
日本文化厚生農業協同組合連合会		
地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究機関などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✳)などを中心に順不同で紹介しています (主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。		

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

名古屋市立大学 市民公開講座 第7回 地域包括ケアと救急医療

住み慣れた町で元気に暮らすために～知っててよかった救急の知識～

■と き 2017年11月18日（土） 13:30～15:30

■ところ 名市大桜山（川澄）キャンパス さくら講堂

講師 名古屋市立大学病院救急科部長 松嶋麻子

名古屋市立大学病院救命救急センター看護師 稲尾景子

名古屋市消防局 岡本元紀

自分や家族が急に具合が悪くなったとき、ケガをしたとき、自分でできる応急処置や救急車を呼ぶタイミングについて救急の医師、看護師、救急隊がわかりやすく解説します。

受講料 500円

募集定員：200名（先着順）

申込・問合せ 名古屋市立大学事務局学術課 公開講座担当

〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

TEL:052-853-8308 FAX:052-841-0261

E-mail:kokaikoza@sec.nagoya-cu.ac.jp

同日、新城市・新城文化会館にて、農業・農協問題研究所・同東海支部・農山村移住と農のある暮らしを考えるIn奥三河実行委員会共催による「農山村移住と農のある暮らしを考えるIn奥三河」も開催されます。詳しくは挟み込みのチラシをご覧ください。研究センターは実行委員会に参加し協賛しています。【会場訂正】新城文化会館・1階展示室→新城文化会館・3階大会議室

書籍紹介

多文化共生地域福祉への展望 多文化共生コミュニティと日系ブラジル人



著者：朝倉美江 出版社：高菅出版 本体価格2700円（税別）

サイズ：A5版 263頁 発行年月日：2017年9月30日

内容：貧困と不寛容が蔓延するなか、最も弱い立場の「外国人」が最も深刻な問題を抱えさせられている。東海地方は「外国人労働者」に大きく依存した地域であり、なかでも日系ブラジル人は「単純労働者」として使い捨てにされている。しかし、かつて彼らの問題であった「非正規雇用」は、今や私達の問題になり、医療などの社会保障制度からの排除も私達の問題である。多文化を尊重しない社会は、誰の人権も尊重できない排除のコミュニティをつくる。本書で私達は誰もが安心して暮らせる多文化共生コミュニティをどう創造できるのかを考えてもらいたい。

執筆者：朝倉美江氏（金城学院大学人間科学部教授）よりご紹介

研究センター 11月の活動予定

11/2(木) NEWS編集委員会

11/3(金) 三河地域懇談会「岡崎まち歩き」

11/6(月) 「協同（組合）をどう学ぶ？」市民の講座（仮称）

11/7(火) 尾張地域懇談会・世話人会

11/8(水) 三河地域懇談会・世話人会

11/10(金) 生協の（未来の）あり方研究会

11/11(土) 共同購入事業マイスターコース⑤

11/12(日) 第9回ポスト福祉国家のサードセクター論・公開セミナー

11/17(金) 協同の未来塾⑥

11/18(土) 農山村移住と農のある暮らしを考えるin奥三河

11/22(水) 研究フォーラム環境・世話人会

11/24(金) 常任理事会

11/28(火) 寄付講義相談会

地域と協同の研究センターNEWS158号

発行日2017年10月25日定価200円（税・送料込み）

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 西川幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>